

## 男性保育士への期待と課題

### — 女性保育士への意識調査に基づいて —

学校教育専攻

幼年発達支援コース

吉田耕平

指導教員 橋川喜美代

#### I 問題の所在と研究の目的

最近、男性保育士が社会的に注目されている。実際、保育現場においても男性保育士を目にする機会も増えてきた。

男性が保育士資格(保育士資格)を取得できるようになって30年。1992年に1000人に満たなかった男性保育士の数は、2002年には4030人と4倍に増えており少しずつではあるが増加傾向にある。こうした増加には、男性保育士の保育への期待と同時に、性犯罪などの問題も引き起こすといった不安も増大させていると考えられる。

女性保育士中心の保育現場に、男性が参入することは、保育は女性の仕事であるといった考えを払拭する期待が持たれたものの、性別役割分業観に阻まれ、さまざまな人間関係に悩むといった男性保育士の実態も報告されている。しかし、子どもの発達において、男性保育士の存在を考えると極めて重要である。両性が保育の場に存在することで、ジェンダーの認識と感性を子どもたちに発達させたり、自らの性に対するポジティブな認識と感性を形成するなど、人間としての同質性とジェンダーとしての異質性を統一的に学習するうえで重要である。

そこで本研究では、女性保育士を対象に行った意識調査に基づいて、男性保育士への期待と課題点を明らかにすることを目的とする。

#### II 研究方法

##### 1 調査対象

質問紙調査 2006(平成18)年6月～8月

T県公立保育所に働く保育士

[回収率25.2%, 女性106名, 有効回答数104票]

##### 2 調査内容

(1)男性保育士へ期待する保育, 女性保育士の保育を5つの回答選択肢から択一で回答を求めた。

(2)担当する子どもの年齢別にみた男性保育士の必要性を3つの回答選択肢を用意し, 択一で回答を求めた。

(3)男性保育士へ期待する職務, 女性保育士の職務について13項目からなる質問に, 5件法によって回答を求めた。

(4)男性保育士の雇用と定着を妨げる要因について5項目から複数選択で順位を付けて回答し, その理由を自由記述で尋ねた。

(5)男性保育士がいることで保護者に与える影響について, 自由記述で尋ねた。

##### 3 分析方法

年齢の意識の差異を明らかにするために分析では(I)30歳以下, (II)31～40歳, (III)41～50歳, (IV)51歳以上の「年齢区分」を用いた。

#### III 調査結果と考察

女性保育士は自らの保育を「男女同じ保育」とジェンダーニュートラルに考えている。事実, 男性保育士が少ないことや従来の保育現場の現状を

考えると、男性的役割を担っているのは女性保育士である。そして、女性保育士は女性の仕事と男性の仕事があると考えており、男性保育士に対しては「男性の仕事」を期待している。保育現場では、場面によって、無意識のうちに男性保育士を排除しようとする傾向がみられた。しかし、保育士としての高い専門性を身につけるためには、男女お互いのもつジェンダーという壁を乗り越える必要があるのではないか。つまり、男性保育士に対してジェンダーバイアスをなくし、「男性の仕事」を求めるだけでなく「女性の仕事」を行うことも評価していくべきであろう。

人間としての同質性とジェンダーとしての異質性を統一的に学習するジェンダー教育からみると、保育の現場では、ジェンダー教育の考え方に即した実践が行われているものの、女性保育士は「ジェンダーとしての異質性」にとらわれているのである。この考えにとらわれている限り、男性保育士が保育現場に入ることによって性別役割分業が発生するなど、ジェンダーニュートラルな保育を行うことは難しいだろう。

それを年齢別にみると、若年齢層の女性保育士は自らの意味付与する「保育」を「第2の家庭の母」と位置づけている。男性保育士への期待を男性保育士との勤務経験がある者は第2の家庭の父としての役割を期待し、男性保育士との勤務経験のない者が、ある者よりもジェンダーニュートラルにみる傾向が若干ではあるが高くなっている。高年齢層の女性保育士は自らの保育を「男女同じ保育」とし、男性保育士との勤務経験がある場合にジェンダーニュートラルとみており、勤務経験がない場合に「男性の視点」や「第2の家庭の父」といった異性の

特性を強く求めていることが明らかとなった。

つまり、保育において個人のもつジェンダーとしての人間的魅力とジェンダーニュートラルな高い専門性を身につけることができるのは、年齢や保育経験を積み重ねてきた高年齢層の女性保育士であることが分かった。

そして、男性保育士の低年齢児保育担当に積極的であったのは、高年齢層の女性保育士であった。男性保育士との勤務経験者は少ないものの、積極的に評価しており、ない場合でも0歳児保育では半数の女性保育士が「必要である」と積極的に男性保育士の低年齢児保育担当に期待していることが分かった。逆に若年齢層の女性保育士は、性別役割分業観を意識し、男性保育士に父親的役割を期待していることが明らかとなった。つまり、その年代の受けてきたジェンダー教育と保育士として保育経験を積む中での、子どもとのかかわりや研修など女性保育士を取り巻く環境が大きく関係していると考えられるであろう。

そして、男性保育士は増大の障害になる決定的要因を「労働条件」としているが、女性保育士は男性保育士の増加しない理由に条件設備だけでなく男性保育士自身にもあると指摘している。また、1999年4月以降保育職に従事する者は男女問わず「保育士」という名称で呼ばれるようになり、「保母」という名称では公的に呼ばれなくなったものの、依然保育職は女性職であるという意識が残っている。

#### IV 今後の課題

今後は対象者を増やすとともに男女間での比較を設けることにより、性別の違いによって保育観がどのように異なるのか、また、男性保育士との勤務経験の有無による女性保育士の男性保育士への期待について再検討しておく必要がある。